

「敗者復活戦はこれからさ」



Filthy

関東の片田舎に仙人のように暮らす。46歳。シャベルチョッパー所有。シャベルに対する愛情を「童貞を奪われた女を忘れられるわけがねえ」と表現する。今年の秋に久しぶりに童貞を奪った女に会いに行く予定だ。

Photo : Aoe Takashi Report : Omori Shigeyuki



エンブレムでもなく「ロングブーツ」なんていう日本の名前が呼ばれるのも嫌う。FRYEのハーネスブーツ。部屋の中を歩いた場所、履くのが楽だから、そこに履いて表に出る。まだよそ者の特別感に残るけれど、残りの人生ももう一足必要にならばいいから、いいかもしれない。バイカーの証である。

記憶は何もなかった。気がついたらベッドの上で身体には何本ものチューブがつけられていた。後から聞いた話だと、いきなり右折してきたクルマにぶつかり飛んでいったらしい。入院生活1年2ヶ月。退院して一番最初に買いに出かけたのはブーツだった。病院に運び込まれた時にお気に入りのFRYEのハーネスブーツは切り裂かれて脱がされた。こいつがないとバイクに乗れない。まだまだバイクに乗れるような身体ではなかったけれど、それでもブーツさえ履いていればバイクの心算がいらされる。だから同じブーツをすぐに買った。左手は何の言のことも聞かず、立ち上がるのすら困難だった。ブーツなんて履けるはずもない。けれどそこから始めないとその先に進めない。退院して4年。何十分もかかって、それこそ指の皮が擦り剥けながら、全身を使っただけで履けたブーツ。

着続けたハンソンの革ジャンを羽織って歩くようになった。ブーツも最初ほど時間をかけずに履けるようになってきた。お気に入りのジーンズに革ジャンにベストを重ね着して、ハーネスブーツで足元を固める。それが正装であって、次に進むための準備だった。そして最近、自分のシャベルチョッパーを修理し始めた。少しだけ次に進んだんだ。まだしつかりとは歩けないけれど、まだ左手は十分ではないけれど、まだまだやらなければならぬことも、まだまだ乗り越えなければならぬ壁もあるけれど、いつまでも「まだ」とばかり言っではいけない。



リーのベストの裏地には綿腫ではないステッチが、ひとつの季節を使ってカンパンを縫い込んだ。それも戻すために必要。準備はだいたい整いだした。

ハンソンのシャベルチョッパーは20年着ている。ポケットには穴があき、何となくとくにその穴あきで悩んでいる。ほつれた縫製はかなりの数。